

# AV JOURNAL

1987年3月 第11号



〈デシジョンルームにて〉

## 目次

“外大における外国語授業について”	
外国人教師による座談会(第3回).....	2
LLの不可思議.....	ニナ・メラー・アナセン... 8
〈出版物案内〉.....	10
文化の差と笑い声.....	郡 史郎... 11
私説「視覚映像文化論」.....	林田 雅至... 12
最果ての地 ブルターニュ(Breizh).....	湯川 史子... 14
編集後記.....	16

## “外大における外国語授業について”

# 外国人教師による座談会 第3回

(1987年2月5日)

出席者		視聴覚教育委員会委員	
バーサンジャヴィン・ルハックヴァ (モンゴル語)		乙 政 潤 (ドイツ語)	(司 会)
ルンベラ, ビエンビェニド (フィリピン語)		上 神 忠 彦 (中国語)	
ハムザ, イサム・モハメッド・リアド(アラビア語)		山 本 進 (留学生別科)	
ウ・エー・ペー (ビルマ語)			
アミトラノ, ジョルジョ (イタリア語)			
マビーラ・マルキーナ, オスカー・アレハンドロ (イスパニア語)		通 訳	
サンニコワ, アラ・ウラジミロヴナ (ロシア語)		斎 藤 隆 文 (英 語)	(日本語→英語)
		加 藤 鉦 三 (英 語)	(英語→日本語)
橋 本 勝 (モンゴル語)			
田 中 泰 子 (ロシア語)		岸 本 晴 広 (L. L. 係)	

今年も視聴覚教育委員会の事業の一環として「外国人教師座談会」を開いた。通算して第3回目である。さきの2回ではスポットライトを学生にあて、「外大生の外国語学習について」ということをテーマにしてきたが、今回はむしろ焦点を先生の方にしぼり「外大における外国語授業について」話して頂いた。気楽な座談会の形式をとっていたが、御参加の先生方の真面目な御発言のおかげで、中味の濃い会合になった。

お読み下されば分かることだが、LL教室の利用や外国人の先生と日本人教師の協力について、私たちがまだまだこれから掘り下げて行かなければならない問題が日常の営為の中に潜んでいる。本座談会は、それらの問題を発見するのにいささかなりとも貢献しているのではないかと思う。また、外国人教師の方々が意見を交換されて問題点を知られるためのささやかな場になっているかとも自負している。

今回も御都合で御出席頂けなかった外国人教師の方々は、次回には是非お招きしてお話を伺いたいと思う。

司 会： それでははじめさせていただきます。

私、本学視聴覚教育委員会の委員長乙政です。日本語の発言は英語に、英語の発言は日本語に翻訳されます。語科の教官においていただいているところは、その言語で発言していただいで結構です。

出席者紹介(略)

通訳者紹介(略)

本日の主要テーマは、「外大における外国語授業について」ということ、それをつぎの4つのサブ・テーマ、

- 1) どのように教えていますか?
- 2) 授業の目標は何ですか?
- 3) 日本人の同僚と協力なさっていますか?

4) 学科のカリキュラムとの関連はどうですか?

以上についてそれぞれお話を伺いたいと思います。それでは最初のテーマから。L.L.の授業をなさっていますルハックヴァ先生からいかがでしょう。

ルハックヴァ： いま2年だけを担当しています。従来(M)の方鉢の踏しゅうなのですが、私自身としては1年からL.L.をやったほうがいいように思います。1年次から音声、発音、文法等の言語の基礎を固め、誤りは正し、2年では引き続いてさらに精密化させるべきです。ところがいまは2年生だけ、それも週に1回。他学科のことはわかりませんが、もう少しふやす方向にもって

いきたいと思います。

司 会： 関連していかがでしょう。

イ サ ム： アラビア語の事情もモンゴル語と同様

(A) だと思うのですが、私の場合も2年生から教えます。特に日常会話を2年から4年まで。2年に関しては、3、4年生より気を使います。2年生の場合も基本的なところから教えなければなりませんし、L.L.に関していえば、テキストがなかなか手に入りにくい。むこうのラジオ放送、これは方言によるものですが、これをまず耳から入れる。つぎにタイプしたテキストを与える。目と耳の両方、または単語の使い方を訓練する。何年かそのように教えています。

司 会： 西洋語からアミトラノ先生いかがでしょう。

アミトラノ： 6クラス教えています。L.L.では1年

(1) 生を。ルハックヴァ先生の意見に同感です。1年生にとってL.L.は重要です。L.L.のクラスでは主に Spoken Italian をラジオ、テレビ、フォークソング、オペラや歌などで聞き取らせます。そのようにして日常会話のさまざまな状況を身につかせます。1年生で一応のレベルに達することができるようですが、これはイタリア語の発音やイントネーションが日本語に似ていて、特に基本的な母音の私たちは同じであることによるのです。だから2年生以上では文法や文型の教育を中心にしていけることができます。

司 会： 2番目のテーマに移らせていただきます。2番目のテーマは「授業の目標を何においていच्छるか」ということですが、サンニコワ先生いかがでしょう。

サンニコワ： 外国語を勉強するときとくにL.L.の  
(R) 授業は大切です。ロシア語の場合ですと、ロシア語が話されてないところでそれを学ぶのですから、学生達をいろいろな生活のシチュエーションの中において、そこで話ができるようにしていくこと、それが一つの大きな目標です。ルハックヴァ先生がおっしゃったように、1年生から

そうした授業をもつようにすることが大切です。まず正しい発音を身につけ、それから日常よくあるシチュエーションを、一年生の場合ですと、「お知りあいになりましょう」という短かい映画を見せて、それぞれの場面において、そこでどう発言するか、どう答えるかを学ばせます。ただ教室に座ってテキストをみているだけの場合に比べて、質問にも自分で考えて答えることができるわけですから、そういうシチュエーションに学生を立てさせる、そして考えさせて答えさせる、それが目的となります。ただロシア語科の場合視聴覚の資料が少なく、もっとたくさん買って欲しいと思います。

エー・ペー： 来日して3年、4クラスを持っています

(B) す。1年生から4年生まで。それぞれのクラスで、二つの教育目標を設定しています。片方では教科書をもとにした読み書き、もう一方では、特にビルマの民俗、風習等を理解させること。1年生では来日当初は、大野教授と別々にクラスを持っていましたけど、私から提案して、共同してクラスを持つようにしました。ですから共同授業をやっているということですが、発音、会話、読解能力等すべてに効果があがっています。2年生では、単独で講読、作文等をやるのですが、とくにL.L.においては、施設設備もよく、スタジオ、録音室等を活用して教材を作成し、それを見せたり聞かせたりして繰り返し練習することでビルマ語実用会話と



しての成果をあげています。3年生でもL.L.で会話練習をさせていますが、教材は私が録音室で作ったり、また毎年来る留学生に依頼して吹き込んで貰う、またクラスでもいろいろ話して貰ったりします。そういう貴重な直接的コミュニケーションの機会を、3、4年生のために活用する。4年生についても単独で、古典、小説、ことわざ等を使用します。大学院においては、生徒は二人ですが、語科の教官達と協義し、指導しています。語科の学生は、一部の者は熱心ですが、一部の者はアルバイト等で忙しいのか、授業にも出ないし、あまり出来ません。まあ8割方はよく出来るほうでしょうが。先程もそういう意見が出ましたが、ビルマ語の資料、とくにビルマ語学関係の資料は少ない。先日も学生と一緒に卒論用の資料を図書館でもさがしたのですが、見つからなかった。そこで大野教授にも、学生用の資料も含め、もっと買って欲しい旨を伝えました。

マビーラ： 1年生から4年生までの会話授業を6  
(S) クラス担当しています。1、2年生の授業の柱としては、文法、シンタックス、語彙等、いくつかあります。日常出くわす状況について絵を見せ、ディスカッションをさせます。授業はL.L.は使わず、従来の普通の形態で行っています。といっても、私に別段の考えがあって、L.L.設備を使わないということではないのですが。3、4年生対象の担当クラスは2つです。どちらとも両学年の混合クラスですが、ここで一つ問題が生じます。3年生と4年生では様々な面で軽視できない差異があり、3年生が4年生の話していることを理解してついていくことができなかつたり、4年生が3年生のやっていることに注意を向けなかつたりということも時たま起こります。テストは行ないます。基本的には文法について、動詞の特殊活用——スペイン語では、動詞の活用パターンがいろいろありますから

——、語彙、シンタックス、作文等を日常会話入門レベルで扱います。また、標準的なインテリレベルの単語やフレーズも扱います。授業における私の狙いの一つは、常にスペイン語を話させることです。本学に来て感じたのですが、学生達は授業で教師から要求されるとき以外はほとんどスペイン語を話しません。会話の授業ですら、日本語を使う者もいます。私の授業は1年生のときから一貫してスペイン語だけを使っていますが、会話の授業ですから、それはごくあたりまえのことだろうと考えています。

司 会： 3番目のテーマ「日本人の同僚との協力について」に移らせていただきます。ただ必ずしもテーマ通りということではなく、日常感じておられることをどうぞ自由に御発言下さい。

ルンペラ： 授業は私をサポートして下さる日本人  
(Phi) の教官と一緒にやっています。ですから私の語科では、客員教授の私も、日本人の教官も、常時出勤しているということになります。言語習得の際には、その言語の背景にある文化を教えることが重要だ、というのが語科の方針で、その意味で、授業での、教官の役割分担を行なうわけです。客員教授としての私は、発音、シンタックス、イントネーション、文化的背景をじかに説明するという役割を担うことになります。フィリピンのテレビ、映画等の視覚教材を使う機会もありますが、この際、日本人教官では完全に説明しにくいような文化的な事柄、文法、シンタックス面での説明を受け持つわけです。

田 中： ちょっと質問してよろしいでしょうか。  
(R) 一緒に授業をするというのは教室に二人の先生が一緒に立たれるということでしょうか。

ルンペラ： 1コマの授業時間を二つに分けて、最初の部分は日本人教官が、後の部分は私ですが、という風に行ないます。時には時間内を通じて、日本人教官と私の二人が一



緒にやることもあります。

エー・ペー： 特に1年生のクラスで、日本人教官との共同授業をやっています。大野先生と私が教科書を使って行きます。まず大野先生が教科書の説明をし、次に私が発音指導を受け持ちます。言語の文化的背景、様々な伝統的文化についての説明は、大野先生と私の二人で行います。この共同授業の形式は、1年生のみを対象としています。

ルハックヴァ： 1年生のみ共同授業方式をとっています。1週間に1回、共通のテキストを使って、発音を私が担当し、説明や翻訳は日本人の教師が担当しています。先程も申し上げましたように、1年生ではL.L.の授業がありません。言語の基盤となる発音面等の不備となってしまう、以降の学年でのきちとした習得に妨げとなってしまうことがあります。総合的にみると第2、第3学年も非常に重要だと思います。その段階でいい教材を与える。知っていなければいけない言葉の知識、あるいは文化的な事柄、これを集中的に第2、第3学年に与え、それをさらに最終学年にむけて集約していくことが大切だと思います。そこで個人的なことになりますが、現在第2学年用のテキストを橋本先生と共同編集中ですが、いずれきちんとまとめて、出版できるようにしようと考えています。2年生の段階できちとした言葉の知識を習得していなければ、3、4年生でもしっかりした成

果はあがらないでしょうから。

エー・ペー： 先程述べたことに関連してですけれども、1年生から3年生まで、きちりとした発音を身につけるため、1週間に1回、歌を歌う時間をもっています。これは会話能力の向上にも効果を上げています。いや、失礼、2年生から4年生まででした。

山 本： 先程から日本人教官と外国人の教師の方との合同クラスという話題が出ていまして、私が学生のときはそういう授業はありませんでしたので、時代も変わったという気がします。外国人の教師の立場として、そういう授業は効果的だとお考えでしょうか。つまり、外国人の教師の方お一人で行なわれる場合と、日本人の教師と合同で行なわれる場合と、どういう効果の違いが生ずるのでしょうか。そのあたりについてもお考えをお聞きしたいと思うんですが……。

ルハックヴァ： 共同授業の利点はあります。担当学年は1年生ですけれども、彼らは当のモンゴル語についてまったく何も知りません。英語なんかだとそういうことはないんでしょうが。ですから、共同でやりますと、私の説明だけでは学生が十分には分らなかった文法とかの説明は日本人の方がよりよく説明して補うことができるわけです。ただ、結果は学生いかにかかっています。学生の意気込み一つで、場合によってはなくてもかまわないと思います。まさに学生のやる気、勉強意欲、結論としてはそれがすべてだと思います。でも、現実には第1学年には共同授業が効果があると思います。ですから最初の3ヶ月、夏休み前位までは共同授業でいいと思います。それ以降は単独でもいいでしょう。

司 会： 4つ目のテーマには学科のカリキュラムの中での先生方の授業の位置づけを予定していましたが、日本人の同僚との協同の効果についてさらに話し合い願うことにしましょう。



ルンペラ： 日本人学生への教授法においては、英語、フランス語、イタリア語等、普通学生がよく耳にする言語と、モンゴル語、タガログ語(フィリピン語)、ビルマ語等、耳にあまりなじみのない言語とでは大きな差異があります。後者を教える際には日本人教官とネイティブの教官との共同作業は効果的だと思います。日本人教官自身、授業のとき、文法的なこと、文化的なことでわからないことがありますので、その疑問点を明らかにしてくれるネイティブの教師にいてほしいわけです。逆にネイティブの教師としても、日本語で直接学生達に説明できないため、困る面も出てくるわけです。分担して共同授業を一年間やれば、学生にとって意義あるものとなります。上の学年に進む時点では、共同授業をする、しないは、個々の教官の裁量にゆだねられることとなります。

エー・ペー： 共同授業は大変効果的だと思います。1年生をこの形式で教えるのですが、まず大野先生が教科書をもとにして教え、それから私がお手本を示すために読んでみせ、その後学生一人一人に読ませて発音指導をすることになります。またフィリピン語のルンペラ先生のおっしゃったように、外国人の教官と日本人の先生が助け合うことで、学生の理解も深まります。私としては日本語をあまりよく話せないので、大野先生を通しての共同授業はよく機能していると思います。

サンニコワ： 各先生方が連絡を密にして共同で授業をすることは大切だと思います。ただ共同で授業をするということにも二つの考え方があってと思うんですが、たとえばロシア語科などでは全部同じテキストを使いながら、まず日本人教官が文法を教え、講読、練習問題をやり、最後に客員の私が会話を教える、そういうやり方で連絡を密にすること、これが一番いいやり方ではないかと考えます。一つの教室に二人の先生がいて授業をするという



ことは、時間ももったいないとは思いますが。心理学者がそれについては証明しているんですけども、人間の心理として、安易なほうに流れていく。だから私が一人で教室に来て、それは日本人の発想法とロシア人の発想法は違いますが、他に誰も助ける人がいないと、学生はロシア語で私の発想法を理解できるよう全身で集中するようになりますし、質問に対しても答えようとします。ところがそこに日本人の先生がいて説明したりしますと、学生達は必ず、日本人の方の訳にすがったり助けを求めたりしてしまいます。ですから、積極的に言葉を覚えるためには、二人の先生が同時に教壇に立たないほうがいいと思います。作文の授業は別だとは思いますが。それからもう一つ、ロシア語の話されていないところでのロシア語の教育にとっては、L.L.の授業は非常に大切ですので、各学年すべてにあるべきだと思います。そこで歌を歌ったり、詩を暗誦したり、発音、イントネーションの練習をさせたいのです。しかし、私が今年ここで授業をしてみても、現実にはL.L.教室の時間割の都合で教室がなかったりということもありましたので、教室もふやして頂き、各学年にL.L.授業がもてたらいいと思います。

マビーラ： 日本人教官との共同授業というのは、文法、シンタックス、文化面を教えるときには必要とされるやり方ではありますが、会話の授業では必ずしも効果が

あがらないと思います。会話のクラスでは、学生は、常にその言語を使って話すべきで、日本人教官と日本語で話すというのでは話になりません。母語の拘束というのは強力なものですから、学生はどうしても日本語を使いがちになります。会話のクラスでは、共同授業ではなく、ネイティブの教官のみの授業形態をとったほうが良いと思います。

司 会： 相当対立してきましたね。大変面白い話題になってきたんですけども、時間がわずかしか残されていません。そこで今まで発言の少なかったイサム先生にこの問題につきまして、あるいは他のことについても結構です。御発言をお願いします。

イ サ ム： そうですね、いろいろありますけれども、二つか、三つ位にまとめさせていただきます。先程のテーマでは、ロシア語の先生のおっしゃったことに賛成です。共同授業というのは、教師にとっては自己満足になるかもしれませんが、学生にとっては時間はもったいないし、外国語というのが、もとのかたちを失って、日本語化されたかたちでしか伝わりません。私の場合、会話を教えていますが、日本の学生とその他の国の学生を教える場合、違う点があります。日本の学生はシャイというのではなく、積極的にしゃべりたがらない。外ではしゃべりますが（笑）。クラスの中ではしゃべりたがらないのが特徴ですから授業の目標としては、第一に、まずしゃべらせること。積極的に授業にとけこませること。学生というのは後(の席)から座りますよね(笑)。私は最初から前から座わらせませす。それに教壇には立たず、学生の席の中に入ってしゃべらせるようにする。学生に自分からしゃべらせるといっても、私が作ったテーマでしゃべらせるのでは効果はあまりありません。学生達に自分でテーマを作ってしゃべらせませす。つまり日本文化、あるいは自分達の私生活からテーマを選

ばせ、毎週一人に発表させる。自分で毎日しゃべっている日本語をアラビア語にさせてしまう。みんなのまえでしゃべらせることで恥かしさを消す。そこへ私が、そういうテーマについて、アラビアではそういうこと(習慣等)はないですよと説明することで、逆に文化交流にもなります。従って2年生からやるよりは、是非1年生からの授業であって欲しいわけです。もう一つ問題なのは、3、4年生と一緒に授業するのは効果がないと思います。特に4年生の場合、卒業するまえにその外国語を上手にものにして欲しいのに、それが3年生で習ったことをもう一度繰り返すことになり、退屈でもあり、意欲も失いがちになります。それと外国人教師というのは、特に外大のなかでは、単に学生だけのためにあるというのではなく、他の(日本人の)教師のためにも役に立たなければいけない存在であると思います。一度にたくさんしゃべりましたが、これが私の言いたかったことです。

アミラーノ： 外国語を流暢に使うことができるようになる鍵は、何かに頼ることなく、その言語を使うことです。大学入学時、多くの学生が辞書に依存しているのが見うけられます。教官側は、辞書に頼るのをやめ、頭を、記憶力を働かせるようにと指導すべきです。日本人教官との共同授業を行なうということは、場合によって、この辞書に依存する状況に似かよってしまいます。つまり日本人教官を生きた字引きとして頼ることで、学生が、依存的姿勢を脱却して想像力を働かせることが、おろそかになってしまいます。自分の知識のストックがあまりない場合でも、外国語で表現されていることが理解でき、かつ自分の言いたいことも表現していけるのだという自信を持たせるように学生を養成していかなければいけないでしょう。たとえば、1年生のやる最初のレッスンは、“こんにちは”“おはようございます”等の外国語のあいさつの習得です。

これには辞書の使用も、日本人教官のサポートも不要です。もっとも、日本語での説明を要する場合があります、それも大切なことです。だからといって共同授業形態を取るのではなく、むしろあくまで別々に、外国語での外国語指導と、日本語での外国語指導を分けて行うのが一番よいと思います。と言いましても、先程フィリピン語科のルンペラ先生のおっしゃったように、学生にとってなじみのうすい言語の教育の場合は共同授業が有意義

であるのは明らかですし、私達イタリア語科の場合でも、授業以外の場所では教官同志が相互に協力し合わなければならぬのは当然のことです。

司 会： 長い間、貴重な御発言ありがとうございました。私どもの委員会では、年に2、3回、『A.V.ジャーナル』を発行しています。本日の座談会は近刊号に掲載させていただきますので、どうか御了承下さい。では、これでお開きいたします。

## LLの不可思議

デンマーク語学科 ニナ・メラ・アナセン

もし、その国の言語ができない外国で自分の母語の外国語教師であるならば——もし、実践的言語習得がその目的言語でのみ行われるべきであり、言語がコミュニケーションであり、また非言語的コミュニケーションでもあるという——このことは周知の如く対話の相手が見えるということを要求するが——教育信条を唱導するならば——もし、なんらかの理由で教師としての職務上突然L.L.教室に立ち、生徒が見えなくて——普通は殆どのL.L.教室で生徒の姿は見えないのだが——緑のボタンが突然点灯し、機械が「ピーッ」という音を出し、それに加えて機械類が嫌いならば、〔自分の持ち物をまとめ〕大急ぎで逃げ出すべきである。

この喩えは極端であるが、これは一つにはL.L.の授業はただ単に教室に入り、正しいボタンを押し、日光の猿たちのように悪しきものを見ず、言わず、聞かないことを期待して、「見ざる、言わざる、聞かざる」を決め込むために、モニターやマイクフォンやヘッドフォンの陰に身を隠すことで直接のコミュニケーションを避けることではないということ为例証するのに用いられ、また一つには、指揮所の秘密が内蔵された魂やコダグイの音組織や、もし全てが危うくなった場合の自動射出座席を伴った近付きがたい神秘であるという神話を打ち砕くのに用いられるべきものである。真剣な授業形態としてのL.L.

授業は軽業であり、普通の教室での授業よりもより多くのことを要求する。そして、それは独立して行うことができず、他の授業形態と組み合わせられるべきものである。

このテレビゲームの時代には生徒が教師よりも、L.L.教室にある、その種の機器の扱い方をよく知っており、珍しいものと感じないのが普通であろう。珍しいか否かは知識次第である。したがって、L.L.の授業がいやしくも成功するための第一の前提条件は教師が機器に100%通じていることである。文系の殆どの教師はこの手の機器に100%通じていないであろう。L.L.教室の使用法の徹底した手ほどきと伝授が、そのような設備を有する教育機関で必須であるべきである。さもなくば、全てが無駄になる。

この授業形態が成功するための第二の前提条件は、テクノロジーが最高であること、即ち音再生がパーフェクトでなければならないことである。L.L.教室に長所があるとすれば一つは、いかなる生のコミュニケーション形態も同水準にはならないものとして——そのパーフェクトな音再生である。即ち、騒音や距離が妨げになることや視野に気を散らすものがないことなどである。この点、テクノロジーは奇跡である。これは、音楽愛好家なら知っていることである。そして、それが外国語の一特に生徒の母語から数語族も離れた外国語である場合の一授業でいか



に大切であるかということは改めて指摘するまでもなかろう。しかし、テクノロジーが最高でないならば、やはり全てが無駄になる。

音楽愛好家なら、音楽を直接に体験することがいかに大切かということを知っている。いかなるテクノロジーの奇跡も、生演奏にともなう演奏ミスがありはしないかと思ったり、即興があるかもしれないと思ったりする体験、空間、音、イメージの作り出す共同体験に取って代わることはできない。同じことが言語的コミュニケーションにも言える。即ち、直接体験が最も大切である。したがって、L.L.の授業がなんらかの成果をもたらすための第三の前提条件は、テクノロジーが生徒との直接のコミュニケーションに結び付けられること、即ちL.L.教室での時間の一部を面談によるコミュニケーションに割き、何かを伝達し合うこと、即ち、いかなるテクノロジ

ーも決して補うことができないであろう何かを学ぶことである。このことは、教室の室内配置になんらかの要求がなされることを意味する。どのL.L.教室もみな、生徒たちもまた互いにかつ教師と物理的に直接に伝達し合えるように配置されていなければならない。もしこの直接的コミュニケーションの可能性もまた無いならば、そしてもしそれが利用されないならば、やはり全ては無駄となる。

もし外国で自分の母語の外国語教師であり、突然L.L.教室に立ったならば、そしてもし幸運にも生徒が日本人であるなら、即ち忍耐強く、理解が速く、覚えが速く、そしてありがたいことに、権威に従うならば——そして、もし上で挙げた三つの前提条件が満たされているならば、自分の持ち物を安心して置き、その場に留まることができる。

(訳：新谷俊裕)

### Sproglaboratoriets mysterier

Nina Møller Andersen

Hvis man er fremmedsproglærer i sit eget sprog i et fremmed land, hvis sprog man ikke behersker, og hvis man går ind for pædagogiske principper som, at praktisk sprogindlæring udelukkende skal foregå på målsproget og at sprog er kommunikation, også nonverbal, hvilket som bekendt kræver at man kan se sin samtalepartner, og hvis man af en eller anden grund i sin funktion af lærer pludselig befinder sig i et sproglaboratorium uden at kunne se sine elever, og det kan man som regel ikke i de fleste sproglaboratorier, og den grønne knap pludselig lyser og maskineriet siger "bip" og man iøvrigt hader teknik, så skal man tage sit gode tøj og se at komme væk i en fart.

Billedet er grelt, men skal bruges til dels at illustrere, at sproglaboratorieundervisning ikke bare er at gå ind og trykke på de rigtige knapper og undgå direkte kommunikation ved at gemme sig bag skærm, mikrofon og høretelefoner for i håb om som Nikko-aberne hverken at se, sige eller høre noget ondt, dels at gennembulle myten om, at kommandopostens hemmeligheder er et utilgængeligt mysterium med indbygget sjæl, smukke Kodaly-toner og automatisk katapultsæde, hvis det hele skulle gå galt. Sproglaboratorieundervisning som seriøs undervisningsform er en balancekunst, det er mere krævende end almindelig klasseundervisning, og den kan ikke stå alene, men bør kombineres med andre undervisningsformer.

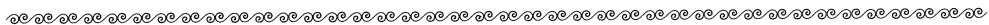
I disse TV-game-tider vil det ofte være tilfældet, at eleverne er mere fortrolige med, mindre fremmedgjorte over for den slags teknik, som findes i et sproglaboratorium, end læreren. Det eneste middel mod fremmedgjorthed er viden.

Derfor er den første forudsætning for, at sproglaboratorieundervisning i det hele taget skal lykkes, at læreren er 100% fortrolig med teknikken. Inden for humaniora vil de fleste lærere være 100% ufortrolige med den slags teknik. En grundig introduktion af og undervisning i brugen af sproglaboratorium bør derfor være obligatorisk ved alle undervisningsanstalter der har et sådan apparatur - ellers er det hele spildt.

Den anden forudsætning for, at denne undervisningsform skal lykkes er, at teknikken er tip-top, hvilket vil sige at lyd gengivelsen skal være perfekt. En fordel ved sproglaboratorier, som ingen menneskelig kommunikationsform kan komme på højde med, er den perfekte lyd gengivelse - ingen støjforurening, ingen afstands-setbacks, ingen synsdistractioner osv. På dette område er teknikken et vidunder - det ved man som musikelsker - og jeg behøver vel ikke her at påpege, hvor vigtigt det er inden for undervisning i et fremmedsprog, især et fremmedsprog som ligger flere stammer fra elevernes eget sprog. Men igen er det hele spildt, hvis teknikken ikke er tip-top.

Som musikelsker ved man også, hvor vigtig den direkte oplevelse af musik er. Intet teknisk vidunder kan erstatte denne oplevelse med dens nervepirrende risiko for fejl og dens fantastiske muligheder for improvisation, fællesoplevelsen af rum, lyd, billeder. Det samme gælder den sproglige kommunikation - den direkte oplevelse er det vigtigste. Derfor er den tredje forudsætning for, at sproglaboratorieundervisning kan give noget, at teknikken kombineres med direkte kommunikation med eleverne, hvilket vil sige at man bruger en del af tiden i sproglaboratoriet på en face-to-face kommunikation, får kommunikeret nogen ting, dvs indlært nogen ting, som ingen teknik nogensinde vil kunne erstatte. Og dette kræver noget af rummet. Ethvert sproglaboratorium må være indrettet således, at eleverne også kan kommunikere fysisk direkte med hinanden og læreren. Hvis der ikke også er mulighed for denne direkte kommunikation og hvis den ikke udnyttes, er det hele igen spildt.

Hvis man er fremmedsproglær i sit eget sprog i et fremmed land og pludselig befinder sig i et sproglaboratorium, kan man, hvis man er så heldig, at eleverne er japanere, altså tålmodige, hurtigtopfattende, lærenemme og gudskelov autoritetstro, og hvis de tre ovenfor nævnte forudsætninger er til stede, godt lade sit gode tøj ligge og blive.



## 〈出版物案内〉

- ★スワヒリ語テキスト.....中島 久編著
- ★スラウド目録ートルコ編ー.....勝田 茂編著
- ★听说 中文課本.....上神忠彦編著
- ★視聴覚外国語教育研究 第9号

外国語学習者の無意識の言語的態度..... 乙政 潤  
ビデオを聞いてLL授業をもっと楽しく、もっと効果的に.. 大木 充  
「スワヒリ語テキスト」の作成に際して.. 中島 久  
スライド目録ートルコ編ー作成を終えて.. 勝田 茂

談話におけるフランス語のイントネーション...郡史郎・大木充

# 文化の差と笑い声

イタリア語学科 郡 史 郎

アメリカ人は実によく笑うと思った。ファーストフードレストランでもパーティーでもうちとけた仲間が集まるところでは笑い声が絶えることはない。隠しどりしたテープを今聞いてみても人耳(?)をはばからぬ笑い声の大きさと量にはあきれられるばかりである。もうひとつ気がついたのは、個人個人で笑い方がかなり違うということで、日本人はしないような笑い方がいくつもある。セサミストリートに出てくるパートというキャラクターがいるが、その笑い方は「ハハハ……」というよりは「アアア……」に近く、音声学的に言えば喉頭の開閉度の調節で母音の強度を周期的に変化させているというような音で、はじめてこれを聞いた時は笑い声かどうか自信が持てなかったことを思い出す。アメリカの白人には確かにこういう笑い方をする人がいるようだ。こんな特に変った笑い声でなくても、人それぞれが自分の笑い方を持っているという印象を受けた。

アメリカ人はよく笑うといってもこれは一般論で、そこには個人差もあれば人種・文化差もあるし(ちなみに白人と黒人の間にも笑い方に差がある場合があるようだ)、さらに地域差がある。ある知人によれば西海岸や南部はよく笑うという。私の印象にすぎないが、大都会よりも田舎の方が、同じ大都会でもニューヨークよりロサンジェルスの方がよく笑うように思えた。

いずれにせよよく笑うアメリカ人は多い。それはなぜか。それは彼らがオープンで陽気だから、というようなステレオタイプ的なイメージを結びつけた答を我々は思いつきやすい。しかしたとえばイタリアに行ってみるとそんな答はウソであることがすぐにわかる。そもそも街角でも家庭でも笑い声を聞くこと自体アメリカよりも、また日本よりもずっと少ない。しかしイタリア人、特に南部の人はオープンで陽気ということになっているではないか。この国ではオープンであること、快活であることと笑いの量はすぐに結びつかないのである。

笑いは情緒的要素と社会的要素を含む。滑稽な時の笑いや楽しい時の笑いは情緒性が強く、いわゆるあいそ笑いや照れ笑いなどはむしろ対人関係に関わるものである。さて、私見によれば、アメリカ人と日本人の笑いのかなりの部分を占めているのは、笑うことによって「私は今快活ですよ」と主張し、「私はあなたの仲間ですよ」という仲間意識を確認するためのものであり、言いかえると迎合的な、社会性の強い笑いである。もちろん笑いを誘発しているのはふつつ何らかの滑稽刺激であり、何を滑稽と思うかには明らかに文化差・個人差があるわけだが、ほんのわずかな滑稽刺激にも強く反応して連帯を確認しようとするのがアメリカと日本であるように思う。一方イタリアでは、人は滑稽な時は確かに笑うが、それが社会的機能を果すことはアメリカや日本よりも少ないようである。他の文化圏ではどうであろうか。

笑い方の違いといえば、録音のためにプロの俳優2人を含む5人のイタリア人に笑ってもらったが、日本人との大きな違いとしてまず気がついたのは、笑い声の「ハ」「へ」等のくり返しの回数である。日本人に意図的に笑ってもらうとどうもハハハハハのように5回あるいは7回くり返しというパターンが多い気がする。五七調はこんなところにも顔をのぞかせているのであろうか。これに対しイタリア人の笑い声のくり返し数は非常に多いのがふつつであった。

外面的にはこのような違いがあるわけだが、内容的にはどうかというと、日本人にとって滑稽な時や楽しい時の笑い声はイタリア人にとってもやはりそう聞こえる。情動表現が万国共通であることの傍証でもあろう。しかしあざ笑いや勝誇った笑いのように対人関係に関わる場合は、日本人の笑いはイタリア人には通じない。

文化差はこのようなところにも存在している。

## 私説『視覚映像文化論』

### (その1：ポルトガル映画・テレビ事情)

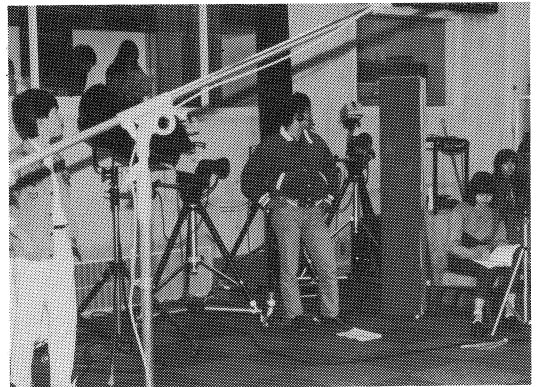
ポルトガル・ブラジル語学科 林 田 雅 至

●84年K化粧品会社春のキャンペーンは当時人気の絶頂にあった歌手Mをマスコット・ガールに仕立て、テレビCMは映像的に、その色調、配色、それにシンメトリックの点から極めてバランスのとれた秀作であったと言える。9人のイメージ・ガールを縦横3等分してできた9つの升目状の平面空間に配し、中央に歌手Mを据えて、彼女にキャンペーン・ソングを軽やかに歌わせている。所々で映像のスピードがダウンして満面に微笑を浮かべた9人全員が春の陽光を浴びる中、《口紅をつけてとても幸せ》とも言いたそうである。一体何を書き始めたのか、と言われそうである●僕はこのCMを見たときに、即座に、『ファニーとアレクサンデル』(1983)を最後に引退してしまったスウェーデン映画界の巨匠L.ベルイマンの『蛇の卵』(1977)のイントロを連想したのである。全く同じ構図である。映像は階段を次々に降りていく人々を9つの升目状の平面空間で捉えている。ただ異なるのはそのテーマである。全員下を向き、色調も暗くマイナスのイメージで、抑圧感さえ漂ってくる●この映画の粗筋はざっとこうである。舞台は1923年11月初頭のベルリン。天文学的数字のインフレに悩まされるドイツ人は、現在にも未来にも希望を持ってなくなり、不安にとりつかれている。ユダヤ系のアメリカ人で空中ブランコ乗りのアベルは、兄で相手役のマクスと或る事故に遭ってベルリンに足止めされている。或る夜ホテルの自室に戻ったアベルはマクスが射殺されているのを発見する。パウアー刑事からいろいろ尋問されたアベルは、その足でマクスの先妻であり、かつての相棒の一人であったが、今は歌手をしているマヌエラに会いに行く。そこでアベルは幼な友達フェアゲルス博士と再会する。アベルとマヌエラは生活を共にし、二人の上に襲いかかってくる不安と闘うことにする。フェアゲルスの尽力で二人は住居と仕事を確保でき、

アベルは或る病院のカルテ保管係の職を得る。或る日、アベルは人類の上に加えられるようとしている奇妙な生体実験についての話を耳にし、間もなくそれが実際に行なわれているのを病院で目撃する。その頃、ミュンヘンではヒトラーが政権獲得に失敗している●財政的に逼迫するドイツ。そこから引き出されてくる、ドイツ人全体に行き渡っている経済的な不安感。そしてそのマクロな総体としての不安感のただ中、主人公アベルが個として抱く2つの一体をなす不安感。兄殺害がもたらす漠然とはしているが、だからこそかえって鋭利に迫ってくる不安感。もう一つは、フェアゲルスの生体実験が、前者の不安感があるが故に彼に直観的に連想させた自らが生体実験の犠牲者になるのではないかという深刻な不安感●これらの不安感を材料にして、僕たちは歴史を手掛かりにして、映画のタイトルである《蛇の卵》が一体何を象徴的に表現しているかを知ることができる。《蛇の卵》は表皮が透明で卵の成育状況が容易に観察できるのである。この場合、《蛇の卵》とは、ドイツ人全体の経済的な不安感を解消するために、生体実験という形・手段で、総体としてのユダヤ人大量虐殺を近未来的に実行する将来のナチス・ドイツであると見てよからう。また、イントロは、映画に即して言えば、上記の不安感を、縋い交ぜにしながらか象徴的に映像の立場から表わしていると言えよう●先のCMとあらゆる点で対照をなすから、丁度明と暗とあまりにもくっきりと対照をなすものだから、連想が容易に働いたのだと思う●何もこれだけのことを言うために紙面を割いたのではない。この映画はまだ日本では公開されていない。恐らく今後も公開は難しいだろう。その理由を推察すると、受け手にかなり強烈に精神的な衝撃を与えるこの映画の持つ広義の残虐性ということにでもなろうか●僕はこの映画をリスボン留学中、2年ぶりの帰国を10

日後に控える82年8月10日午後3時から6時にかけてシネマ・エストゥディオで100エスクード(約200円)を払って観賞している。この時期はヴァカンスでどこの映画館もリヴァイヴァル映画ばかりである。この映画も当然リヴァイヴァルであった●帰国してから友人らに折を見ては日本の映画事情のアメリカ映画偏重を説き、『スター・ウォーズ』が上映されたのと同じ映画館で日本未公開の『蛇の卵』を上映していることなどを話したりした。力説したことは、日本と比較して経済的に国力が10分の1にも満たないポルトガルという小国が、少なくとも映画事情についてははるかに先進国であるということであった。テレビの平日放映時間は国営の2局を合わせても12時間程度であるにもかかわらず、週に1度、評論家でもある映画監督アントニオ・ペドロ・ヴァスコネロスがシネ・クラブというレギュラー番組を受け持ち、彼は番組を、毎月テーマを打ち出して系統立った啓蒙的性格の色濃いものに仕上げている●80～82年の留学中は世界的にドイツ映画復権の時期で、ヨーロッパ屈指の財団法人グルベンキヤンとポルトガル・シネマライブラリー主催による『ドイツ映画特集(1918-1933/1965-1980)』は圧巻であった。特集は1981年1月から4月にかけて100本が上映された。特集の取は79年カンヌ映画祭グランプリのシュレーンドルフ監督『ブリキの太鼓』であった●その後この特集からF.ラング——彼の『メトロポリス』(1927)が一部クイーンの『ラジオ・ガ・ガ』のプロモーション・ビデオに挿入され、それが契機となってジョルジオ・モロダーが映像的にも音楽的にも改竄したもの(1984)が日本でも85年に上映されたことを知る人は多いだろう。ただ日本での上映に際しては、観賞者のために、主人公の一人・科学者のロートバンクが彼の住居の扉に刻まれていたダヴィデの星印(古代のシナゴグ[教会堂]で用いられていたこの装飾は、17世紀頃からユダヤ人によって神の象徴として使われるようになり、現在ではイスラエル国旗の中央に配されている)からユダヤ人であることが分かるのであるが、そのことを明示する必要があると思う。彼は、労働者階級と資本家＝特権階級が和解するための一種の《生贖の山羊》の役割を演ずるのであり、最終的に両階級によって殺害されてしまうのである——の作品14本がピック・アップされ、回顧特集(1981.6.22-7.5)が催されたりし

ている●テレビの方もタイ・アップする形で11月に《秋のシネマ特集》として、原水爆戦争に対する警告を、一つの家族の中に描いた黒沢の『生きものの記録』(1955)、小津の『東京物語』(1953)、F.トリュフォーの『暗くなるまでこの恋を』(1969)などが織り込まれながら、W.ヘルツォーク監督『アギーレ・神の怒り』(1972)、日本では1980年2月に劇場公開された『マリア・ブラウンの結婚』(1978)ですっかりお馴染みになったライナー・W・ファスビンダー監督の『四季の商人』(1971)、W.ヴェンダースの『都会のアリス』(1974)がプログラムに組み込まれている●これは別の話題であるけれども、カンヌ映画祭グランプリの栄冠に輝いた黒沢明監督『影武者』(1980)のロング・ランを受けて、82年4月から6月にかけてテレビで『七人の侍』(1950)、『隠し砦の三悪人』(1958)、『赤ひげ』(1965)、『羅生門』(1950)が次々と放映された●また日本では、ナチス・ドイツ政権下のフランスで地下生活を強いられながら文筆活動で抵抗を続けるユダヤ人劇作家とその妻である女優そして一座に加入する三文役者の微妙な三角関係を政治的・社会的には処理・消化せず、極めてメロドラマ風に捉えた——これは日本のポスターとヨーロッパのそれを比較すればよく分かることである。日本のものは中央に主人公の女優C.ドヌーヴを配し、三角関係に苦悩する女を写しだしている。それに対し、ヨーロッパのポスターはゲシュタポが一座に手入れに来たときのもので、女優と恋仲の三文役者が肩を寄せあって床の隙間からこっそりとゲシュタポらを窺っている場面を写しだしている。二人が持ち上げている床の面には赤地にナチスのシンボル・マークが刻印されている。そしてこの床下では女優の夫であるユダヤ人劇作家が地下生



活を送っているのである——F.トリュフォー監督の『終電車』(1980)と『隣の女』(1981)のヒットに呼応するようにテレビでは81年から82年にかけて先に挙げた作品に加え、『ピアニストを撃て』(1960)、『野性の少年』(1969)が放映されている●さらに付言すると、岩波ホールでしか見られなかった(1979.2.10～)デンマーク映画の名作、ヴェネチア映画祭グランプリC.Th.ドライヤー監督作品『奇跡』(1955)がさりげなく先のA.P.Vasconcelos(1939～)のシネ・クラブの時間に『ドライヤー監督特集』の一環として放映されている(1980.12.23)のも見逃せない。こうした例には枚挙に遑がないのである●ある意味で、映画館とテレビとが理想的に有機的な相互連関のコスモスの中で一枚岩のように共存していると言える●帰国当初、親友をつかまえては日本にもポルトガルのようにテレビで名画特集がないのはどうしてだろうかとよく愚痴をこぼしたものだ。もちろんNHKが世界名画劇場を月に一度放映しているのは知っていた。しかし何か物足りなさを感じていた。ようやく日本テレビ系列で『シネマ・だいすき』というこれまで述べてきたポルトガルにあるような特集映画番組が2年ほど前から始まった。ただ放映時間が深夜だから視聴者は已らずと限定されてくる。8時、9時台に導入されるのはいつのことであろうか●ところで、『影武者』、『終電車』、『隣の女』が封切られたのはリスボンでも最も贅沢でしゃれた素敵な映画館シネヤ・ロンドレスであった。僕のいたアパートメントからローマ通り沿いに500～600メートルほど南東に下ったロンドレス広場の一角にそのシネマはあった。その周辺はリスボン新

市街地で最高の散歩コースである。そこから南に向かって約2キロの所に先に話題にしたシネマ・エストゥディオがある。それにしても新緑の5月、微風・涼風の吹き抜ける中、友人等と連れ立ってその一帯を徘徊し、お茶にしようと屋外のカフェ・テラスにゆったりと腰を下して、エスプレッソを啜り、足元に戯れる木漏日に微笑しながら、行き交う顔見知りのポルトガル人に、少し気取って、しかし恥ずかしそうにBoas tardesと声をかける自分が……今思い出すととても懐かしい気がする●閑話休題。冒頭でK化粧品会社のテレビCMは秀作であると述べた。ヨーロッパ的な価値感で考えるならば、企業が莫大な額を投資して作り上げるテレビCMは現代日本を代表する芸術作品ということになるのかもしれない。けれどもその背後には商品の販売を促進するものでなければならないという企業の至上命令がついてまわる。芸術作品に不可欠の要素である《永続性》という属性はCMには無縁である。現在が大切なのであり、今が勝負である。自ら《一過性》という属性を帯びざるをえない。それは服飾などのファッション・流行と同じレベルで捉えなければならないだろう。今経済大国・日本は夢うつつに芸術と信じて、テレビCMを創作している。その現実をしっかりと直面しなければならない。また、CMの付属品としてのコピーがこれまた文芸活動として大手を振って罷り通っていることも忘れてはならないだろう。有名なコピーライターI氏は一筆3000万円余りと聞く●大連行きを目前に控え大童の日々を何とか感性で繋ぎとめて送っているM.HAYASHIDAより●寒の戻りの1987年2月26日早朝擱筆●

## 最果ての地 ブルターニュ (Breizh)

フランス語学科4年 湯川史子

初めてブルターニュの地を踏んだのはもう三年前のこと。その時には何も知らずただフランスの一地方を訪ねるといふほどのことであつた。たぶん地図で見ていると、フランスの六角形の一角で、ぽつんと海に突き出してなんとなく淋しそうで、ノスタルジックに思われたのかもしれないが。そしてその時

偶然入った Morlaix の musée で見た展示会で初めてブルトン語というものを知った、学校で話すと恥しい罰を受けねばならない禁止された言語として。その時本屋でブルトン語の小さな辞書と文法書を帰りがけに買ったがそのまま忘れてしまっていた。それから比較言語学で再びブルトン語という単語



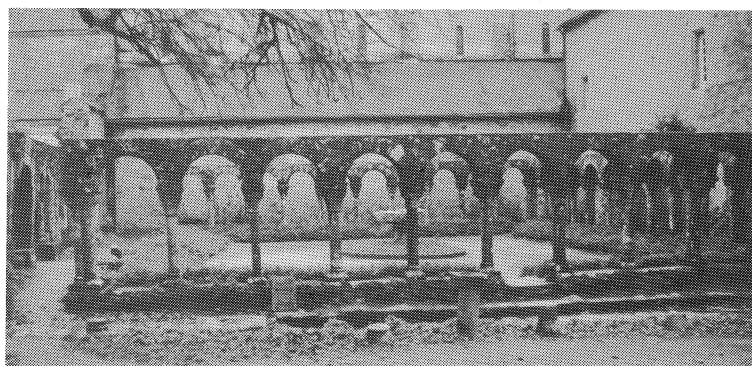
にぶつかった。ケルト語の一分派で、イギリスのウェールズ語、コーンウォール語と兄弟分で、アイルランド語、スコットランド語、マンクス語（マン島の）と従兄弟分としてのブルトン語に、それ以来、ブルトン語、ブルターニュ、それからケルト一般にこだわりを感じてきた。

そして昨年夏からの一年間の留学。パリに居ることになった私は Bret (-on, -agne)/Celt (-e, -ique) という語が目に入ると何でもとびついた。そしてようやく、ブルトン語の授業とブルターニュの民族舞踊！のアトリエを見つけ一年足らず大学の授業には寝坊してサボっても、そちらの方には行く（幸い夜にあったので）というほど、どっぷりとはまり込んでしまった。大学の2週間ほどの休暇があることにモンパルナス駅から夜行でブルターニュに直行して、あちこち周った。

ブルターニュというと日本では何を思いうかべるだろう？ フランスでは、農水産物（キャベツ、エンドウ豆、牛乳などの指折の産地でありかつ海にかこまれた漁業の地でもある）しかないド田舎、フォークロア（ケルト的な伝説——アーサー王と円卓の騎士たちも然り——、巨石遺跡etc）の豊富な地、とヨーロッパの最果ての辺ぴなフランスの一地方としてのイメージが強いように思われる。といて私にしても独断と偏見にすぎない一面的なブルターニュ観しかもっていないのだから確かに過去の歴史は豊かである。特に19世紀のフォークロリストから現代の民族学者にいたるまで、そうした人々にとってブルターニュは恰好のフィールドであり、伝統的慣習や民話の収集もさかんになされてきた。がそれにもまして私には地方のというよりはクニの自律性を取り戻そう、1532年にフランスに吸収され、仏革命後“平等”という名の下に禁止され、死語となりつ

つあるブルトン語をはじめとする自分たちの文化を生かし続けようという運動の活発な土地である。その顕れとして、ブルトン語のブルターニュにおける公用語化、革命後にブルターニュから引裂かれた Loire Atlantique 県（Naoned を県庁所存地とする）の返還といった要求がいたるところで行われている。そしてそこでブルトン語は、文化的と同時に政治的な鍵をもっている。

さて、そうしたことを別にしても、ブルトン語にはそれ自体非常に魅力ある言語である——難しいことも確かであるが。という訳で私は6月大学終了後卒論準備(!?)という名目で二月程彼の地に留まるべく、パリは馴染みのモンパルナス駅より Roazhon(仏名 Rennes)に向かった。そこで一週間、一日8時間の語学研修（もちろんブ語の）を受けた。夏の間ブルターニュではあちこちでこうした語学研修がある。こうした語研に来る人はたいがいブルターニュに何らかの執着（この語の中立的意味に於いて）を持っていて、前に述べたような運動に対しても問題意識が高い。老いも若きも参加者は雑多だが、そんなことお構いなく、一日の授業の後、カフェに行って真夜中が過ぎるまで話し合う。日本でそういうことを経験したことのほとんどない私にとって、それは刺激的であった。日本で活動家たち（どこのとは言わぬが）の言説が空々しく聞こえていたのに、ブルターニュという私には他人であるここの人々が話していることが例えユートピア的な要素があるにせよ共鳴できるということは驚きでもあった。この語研以後他にすべきことをそっちのけに本気でブルトン語を独習しだした。PM7:30~8:30までの Radio Breizh Izel というブ語ラジオ放送を毎日聞き、教科書を一冊終え……紹介がてらに2つほど例を挙げてみると



〈Finistère(地の果て)  
の修道院の回廊〉

1. be動詞に当たる動詞 bezañの現在形の活用

	前に主語来る場合	主語省略形	習慣・反復形	情況・位置
S 1	Me a zo	on	bezan	emaon
2	Te "	out	bezez	emaout
3 M/F	Eñ/He "	eo	bez	emañ
P 1	Ni "	omp	bezomp	emaomp
2	C'hi "	oc'h	bezoc'h	emaoc'h
3	Int(I) "	int	bezont	emaint
Imp.	An nen "	eur	bezer	emeur

cf. haveに当たる動詞はなくは “～が……に在る” という形をとり  
bezañを元にしてできている。

2. 名詞には、男性・女性の区別があり、それを表すのは基本的には語頭の  
子音推移によって示される(詳細は省く)

	Sg.	Pl.
例 <u>m</u> amm (娘)	ar <u>y</u> amm	/ ar <u>m</u> ammoù
<u>t</u> ad (息子)	an <u>t</u> ad	/ an <u>d</u> adoù

cf. 子音推移には5系統あり、その変化は複雑怪奇なり。

話変わって、もっと夢中になっていた(もはや過去形でしか書けない)のはブルターニュの踊り、といっても外から見ていると極めて単調で土臭いものなのだが。手をつないで輪になったり鎖状の形で遠々と続く。ブ語でFest-noz(夜の集いとでも訳すのか)という夜日暮れころから歌や音楽に合わせて夜中まで踊るという催しで踊られる。やって来る人も、おじいちゃん、おばあちゃんから若い人、赤ちゃんづれの夫婦まで、それに加えて特に夏には私のようなよそ者がいる、一度輪の中に入ると隣りの人の振動が伝わってきて、何ともいえない一体感が感じら

れ一種の陶醉状態を味わうとでもいうか。

様々な場所で人と知り合い、よく、どうして数あるフランスの地方の中で、特にブルターニュなのかと尋ねられて困った。好きだ、ということに理由はつけられないとはバルトの言だが、自分でもよく分からない。全てにおいて好きなのだから。強いて言うならそのマイノリティー性の故の激しさに魅かれるといえなくもないが、それは一側面に過ぎない。なぜこだわるのかという疑問はこれから私が答を見つけなければならない課題としてとっておこう。

## 編集後記

◇ Audio Visual Journal 第11号をお届けします。

今号では、今年2月5日に行なわれた外国人教師座談会の記事の特集しました。前回の出席者からも座談会後の感想として指摘された問題ですが、既習外国語(英語)と未習の言語、あるいは西洋語と東洋語の授業について同一には扱えないのではないかという疑問が、今回はとくに鮮明に浮かびあがることになったようです。

◇ 座談会中の発言と、アナセン教授の寄稿からは、L.L.系の抱える問題点も、合わせ痛烈に指摘、批判されていますが、今後の課題として、

大いに検討していかなければならないと考えています。ただ、L.L.授業の方法についてはもちろん、教室の確保その他については、個別L.L.係だけでは解決のつかない問題も多々あります。全学的な討論の拡がりを期待しています。

### AV Journal ー第11号ー

1987年3月25日発行

編集 大阪外国語大学視聴覚教室委員会  
附属図書館視聴覚資料係  
発行 大阪外国語大学  
印刷 ㈱ ム ラ タ 印刷